

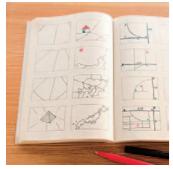
くらしの良品研究所の活動

今週のコラムはご質になりましたか?



あるときはお客様と思いを共有するために、あるときは問題提起として、またあるときは先人の知恵や技を豆知識のように。くらしの良品研究所では、私たちが日々感じ、考えていることをコラムというかたちにして、毎週掲出しています。このコラムに對して、多くのお客様からご意見箱への投稿やFacebookでのコメントなどをいただいているが、最近では「今までのコラムをすべて掲載した“書籍”を発売してほしい」というご投稿までいただきました。これからも、コラムに対するご意見やご感想をお聞かせください。

ご意見パークにお立ち寄りください



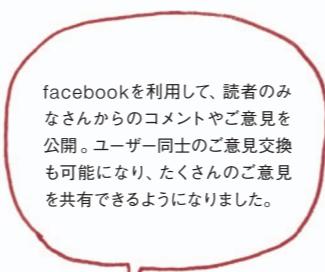
昨年12月のサイトリニューアルで開設した「ご意見パーク」には、「あつたらいいな!」「色・サイズを拡大してほしい」「再販してほしい」などなど、多くのご意見・ご要望をいただいている。そのすべてにお応えすることは難しいのですが、このコーナーに寄せられたご意見・ご要望の中から、「4コマノート」「シリコントレービー玉」「PPシューズボックス」「体にフィットするソファミニ」などの「再販」が実現しました。

<http://www.muji.net/lab/goiken/>

くらしの良品研究所とは

「くりかえし原点、くりかえし未来。」を合言葉に、これから時代に求められる良品像を、みなさんと一緒に探っていく“ラボラトリー”です。店舗とインターネットを介して、生活者であるお客さまと対話しながら、既存商品を点検し、新しい商品を育て、世界のより多くの人々に「これでいい」と共感していただける、感じいい暮らしのかたちを考えていきます。

◇この小冊子は、背表紙に付いた2つのリングをファイルの穴に通して、ストックすることができます。



www.muji.net/lab

no.08
水を知る



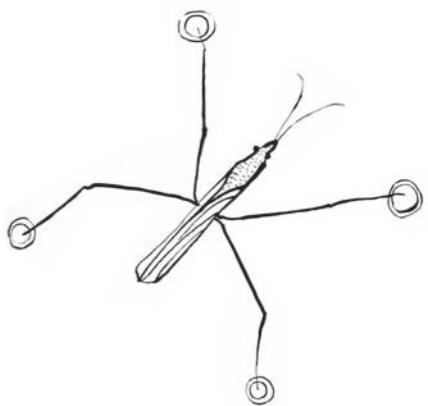
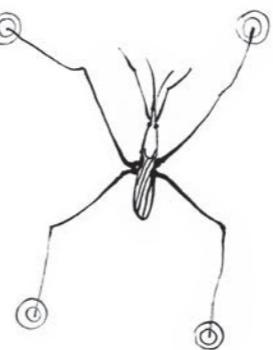
無印良品



第8回
研究テーマ

水を知る

地球上の水の98%は海水で、大気中にある水はたった0.001%。
その水は、雲や雨になったり雪やみぞれになったりと、かたちを変えて動いています。
土に沁み込んだ雨は、湧き水となり、川を生み、やがて海に注ぐ——
そんな循環の中で、私たちは水の恵みを手にしているんですね。
日本は世界でも珍しいほど水の豊かな国。それだけに、水のことをあまり意識しないで
きたかもしれません。知っているようで知らない水について、考えてみましょう。



水はあらゆる生命の源です。地球に水があったから生命は誕生し、私たち人間もここにいるのです。水の語源の一つに、「みづ」は「み=身、生命」+「づ=つながる」で、生命が続くためのもの、という説があるのもうなずけます。人間の体はほとんど水からできています、大人では体重の60%、新生児は80%が水だといわれます。生まれるまでの赤ちゃんは、母親の胎内で「羊水」という水に包まれて育ちます。そしてその10ヵ月間に、人類誕生までの歴史をたどるのだと。まるで、生命の起源の記憶が羊水に記録されているかのようです。水は地球上を常にめぐり、現れては消え、過去の記憶を持ちながら循環しているようにも見えます。もしかしたら、太古の記憶は水によって運ばれているのかもしれません。

水には穢れ（けがれ）を流したり、浄（きよ）めたりする力もあります。日本に昔からある禊（みそぎ）の儀式では、きれいな水で体を洗い流し、穢れを人形に移して川に流します。神社や茶室に入る前も、水で手を浄めます。水は生命の源であり、常に循環して、古いものや穢いものを流していきます。そしてほんの一部がまた大気中に戻り、雲となり、雨となり、水に還ります。水は循環することで浄化していくのです。

水はめぐる

海から空へ、大地へ、川へ、そしてまた海へ。
水はそれ自体が循環するだけでなく、さまざまなものを持ち運び、浄化し、
地球上のあらゆるもの循環を助けています。
水は生命を循環させるための媒体といえるかもしれません。



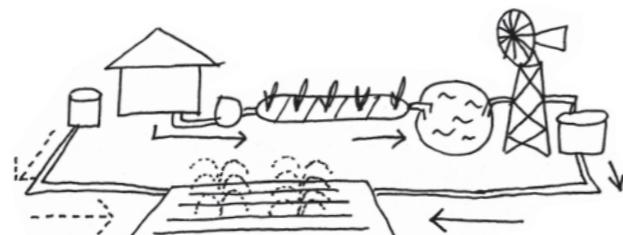
土をよみがえらせる水

さまざまなものを溶かし、それらを運ぶのは、水のもつ大きな力。水の循環が、さまざまな生命を有機的に結び付けているといつてもよいでしょう。ということは、私たちの体内を通りぬけていった水も、そしてもちろん生活排水も、その循環の中にあるということ。その行方に無頓着ではいられません。日本の土はやせていく——土の専門家たちは、そう語っています。土で植物を育てるには、さまざまな微量養分が必要ですが、それらは実は、人間の体を通した屎尿（じによう）に多く含まれているのです。そして、それらを土に戻すことで、土は豊かになるといいます。雑排水、特に屎尿を含むそれにはたくさんのが栄養分が含まれているのですが、現在ではそのほとんどが川や海へ流れ、リサイクルや循環利用はされていません。都市の下水処理の技術は、その栄養素を土に戻すことなく、下水から一挙に海に流してしまった仕組みをつくってしまいました。水の循環を考える上で、上水道だけでなく、下水道も重要な課題だったのです。

かつて江戸の町は、100万人ともいわれる人口をかかえながら、その時代の世界に類を見ないほど衛生的な都市だったといわれます。もちろん、下水道はありません。しかしそこには、稻作を基調とした社会システムの中で、屎尿や生ゴミといった有機物が農村で肥料として土に還り、そこで栽培された米や野菜が江戸の人々の食材になるという循環が成立していました。江戸の屎尿は農村に運ばれて肥溜めに溜められ、発酵させて良質な下肥になったのです。「汲み取り方式」といわれるその方法を進化させて、次に生

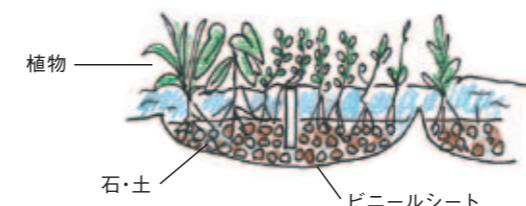


宿泊用ロッジから出た雑排水は、バイオジオフィルターで濾過され、揚水風車で汲み上げて貯水タンクに溜められ、畑の作物の水やりなどに使われます。



ゲストハウスの屋根に降った雨水は、貯水タンクに集めて畠の水やりなどに。栄養素を運ぶだけでなく、水そのものをどう節約するかも考えられています。

【バイオジオフィルターの仕組み】



合併処理とバイオジオフィルターの組み合わせ。排水中の有機物は合併処理槽でまず分解され、小さくなったり有機物は、バイオジオフィルター中の微生物によってさらに分解され、植物に吸収されます。



まれたのが「合併処理」。何層かに分かれたタンク内に屎尿を溜め、微生物で分解した後、その上澄み液を流していく方法です。

山中湖のほとりにあるPICA山中湖ヴィレッジは、パー・マカルチャーの思想で設計された施設です。パー・マカルチャーとは、「パーマネント＝永続的」と「アグリカルチャー＝農」が融合した言葉で、自然の仕組みに学びながら「持続可能な暮らし」を目指すもの。オーストリアの学者が提唱した思想であり生活学ですが、その元となったのは、自然と共生したかつての日本の農業の姿だといいます。PICA山中湖ヴィレッジでは、「合併処理」にバイオジオフィルターを組み合わせ、雑排水を畠に戻していると聞いて、お話をうかがいました。バイオジオフィルターとは、水の中に含まれる栄養素を土に戻すための装置です。

ここでは、合併処理した水の流れのところに土と岩を配し、水を濾過しながら雑排水の中の有機物を水中の微生物によって分解し、さらに植物の根に養分を吸収させて回収しています。水を浄化しながら、その中に含まれる有機物を養分として、植物も育っていくのです。浄化槽から出てきた水は、土と岩でつくった濾過装置を通り、順繕りに次のマス



へと移動していきます。敷地の高低差を利用して水を流すので、動力は使いません。低いところに順繕りに送っていきながら、きれいにならなかった水は最後に貯水池へ。この池の水は、揚水風車で汲み上げて貯水タンクに貯められ、畠の作物の水やりなどに有効利用されます。池はまた、畠の害虫を食べてくれるトンボなど、多くの生きものを呼び寄せます。私たちが訪れた時、池にはカエルがたくさん卵を産み付けていました。「もうすぐ、おたまじやくしでいっぱいになります」と、PICAのみなさん。カエルが棲む池には、それを餌にする蛇が来るし、肉食の鳥であるフクロウもやって来るといいます。小さな池ができるだけで、驚くほど多様な生態環境をつくりだすのです。水の循環の中で、多くの生命が豊かに息づいていることがわかります。

PICA山中湖ヴィレッジ <http://yamanakako.pica-village.jp/>

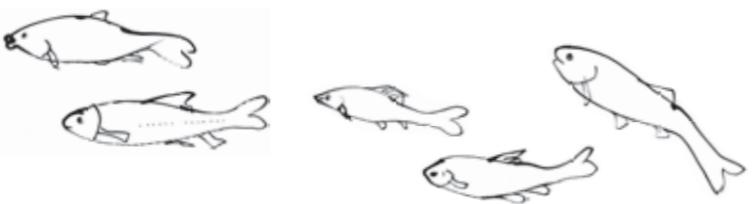


与茂 雅之
藤崎 健太
三浦 豊秋

案内してくださったPICAのスタッフのみなさん。「人と自然をつなぐ」ために、さまざまな活動を展開。その甲斐あって、寒冷地の山中湖にも冬の来場者が増えたという。

川とともに

かつて、川は子どもたちの格好の遊び場でした。
そこは、水も魚もそして人間も解き放たれて、生命が躍動する場。
毎日のように鴨川で遊んだ少年時代から70数年、
いまも川に親しみ、その恵みを店で供する浅井さんに聞きました。



自然、人、暮らし…川を通して見えるもの。

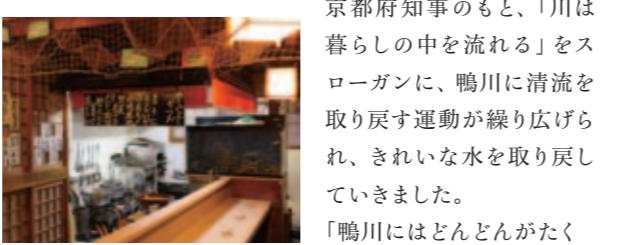
「お父さんは鴨川で産湯を使いはった人やから…」店と一緒に切り盛りする娘の喜美代さんに冷やかされるほど、川を愛する浅井さん。子どもの頃から川遊びに興じ、高校生になった頃には鮎かけまでしていました。実家は、天保年間創業のお豆腐屋さん。「忙しくて誰もかまってくれないから、川で遊ぶしかなかった」と浅井さんは笑います。川好きが高じて、自分で獲った川魚を出す割烹「喜幸」を出したのが、二十歳の時。投網と包丁の両方を持ちながら、店を営んできました。お店から鴨川までは、歩いて3~4分。川に通うには、絶好的のロケーションです。

鴨川は、滝沢馬琴がその著書で「京によきもの三つ」の一つ

に挙げたほどの川。でも浅井さんが子どもの頃には、そんなにきれいではなかったといいます。染色した反物の糊を川の流水で落とす「友禅流し」や生活排水などで水質汚染が進み、魚も棲みにくくなっていたのです。その後、当時の蟾川

京都府知事のもと、「川は暮らしの中を流れる」をスローガンに、鴨川に清流を取り戻す運動が繰り広げられ、きれいな水を取り戻してきました。

「鴨川にはどんどんがたく



さんあるので、そこを通って水がきれいになっていく」と浅井さん。「どんどん」とは、落差のある小さな堰のことでのことで、水が動いてきれいになり、魚も元気になるのだとか。浅井少年は、どんどんの下に魚が集まることにも早くから気づいていました。鴨川の四条を下った「どんどん」の場所には湧き水が出ていて、夏の暑いときは鮎がそこに集まるのだそうです。

「鮎がいなくなる土用隠れの時は、そこに隠れている」と教えてくれました。



その一方で、「きれい」が行き過ぎて魚が棲みにくくなっているという現実もあります。中州にゴミが溜まるという理由で、最近はブルトーザーで川底をならしていくのだと。『川を知らない人が川をいじってる。魚のことなんか考えてえへんから、川ではのうて水路になってる』「流れがあり、ところどころに中州があつてこそ、川らしい川。真っ平らなところでは魚もよう棲まん」と浅井さんは嘆きます。「水清ければ魚棲まず」ということわざを思い出しました。そこに棲む生きものも含めて川を命あるものと見るのか、それとも外見だけを整えるのか。川に注ぐ目線が問われているのかもしれません。



店内には、水槽があり、そこでは獲れたばかりの小魚たちが元気に泳いでいます。取材時は、ちょうど鮎の稚魚を鴨川に放流する禁漁期だったため、水槽内には琵琶湖のモロコが。漁に使う投網がさりげなく飾られているところは、いかにも浅井さんのお店です。投網は網目の大きさによって4種類あり、その中の特に編み目の小さいものは、サギシラズ（ハヤの稚魚）を獲るための網。浅井さんが小さい頃はサギシラズを専門に獲る漁師さんもいたそうですが、「最近は川がきれいになりすぎて、サギシラズもいてへん」とか。

「鴨川に魚がいて、それを食べられる。そのことでお客様に喜んでもらえるのに、その魚がいいひんようになるのはすごい寂しい」浅井さんの隣で、喜代美さんが語ります。「これ以上きれいにしよう、なんていうより、生きものが生きられる川にしてほしい」という言葉に胸をつかれました。



浅井 喜三

京都木屋町で60年以上続く割烹「喜幸」(きっこ)の店主。細い路地に面した家族経営の小さな名店には、料理だけでなく、主人と女将との掛け合いを楽しみに訪れる客も多い。
「喜幸」：TEL 075-351-7856
※月・火曜定休

暮らしをうるおす郡上八幡の水

「水のまち」郡上八幡では、街の縦横に水路が走り、さらさらと心地よい水音をたてて流れています。水路には鯉が放たれ、水は自然に浄化されて、また川に流れ込む仕組み。家の軒先に消火用バケツが吊るしてあるのを見ても、この水が暮らしに密接にかかわっていることがわかります。ところどころに置かれているのは「堰板(せきいた)」。それを用水路に差し入れ、流れをせき止めて水を溜め、洗いものなどに使うのです。庭の植木の水やりや夏場の打ち水も、この水で。暮らしをうるおす水がありました。

創造と水

あるときは静かに、あるときは波立ち、またあるときはほとばしり、さまざまに変容する水は、人間の感情にもたとえられます。

そんな水の中に、自ら染め織り上げた作品を解き放ち、自然と対話させる、辻けいさん。

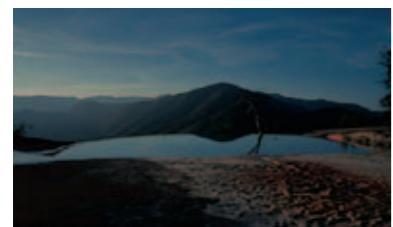
アーティストの心をとらえる水について、お話をうかがいました。



水と出会い、呼応して、糸は自由に呼吸する。



流氷の上に赤い糸を置いたフィンランドのインスタレーション。酸性雨が固まった氷だったのか、その後、赤の色が抜けてしまったといいます。



ミステカとサボテカの民のためのインスタレーション (HIERVEEL AGUA, オワハカ州・メキシコ) 山中に忽然と現れたのは、石灰質の水滴が何億年もかけて溜まってできた湖。

上2点 撮影：辻けい

染織家と水との関わりといえば、普通は染色過程で水に晒す作業などを思い浮かべます。しかし、辻さんが行っているのは、作品を短時間だけ水の中に放ち、自然と対話させるインスタレーション。静止、さざ波、激流とさまざまに変容する水の中に、同じように流体的な糸を放ち、生きもののように刻々と変化する様を見つめます。ここで言う「糸」とは、水の中でたゆたうように粗く織り上げた薄い織物のこと。辻さんが自らの身幅に合わせて、40mの長さまで織り上げたものです。

『水は常に、水に触れた「相手」の意志や形状をあらわします。糸もまた水に似て、固有の意志を持たない代わりに相手の意志や形をあらわにします。糸が求めているのは、刻々と変化する相手の存在のありよう。そんな糸と水がひとつになる時、そこに現れるのは水と糸、お互いの感情の姿であり、それはまた大地の微妙な感情でもあるのです。』(辻さん)

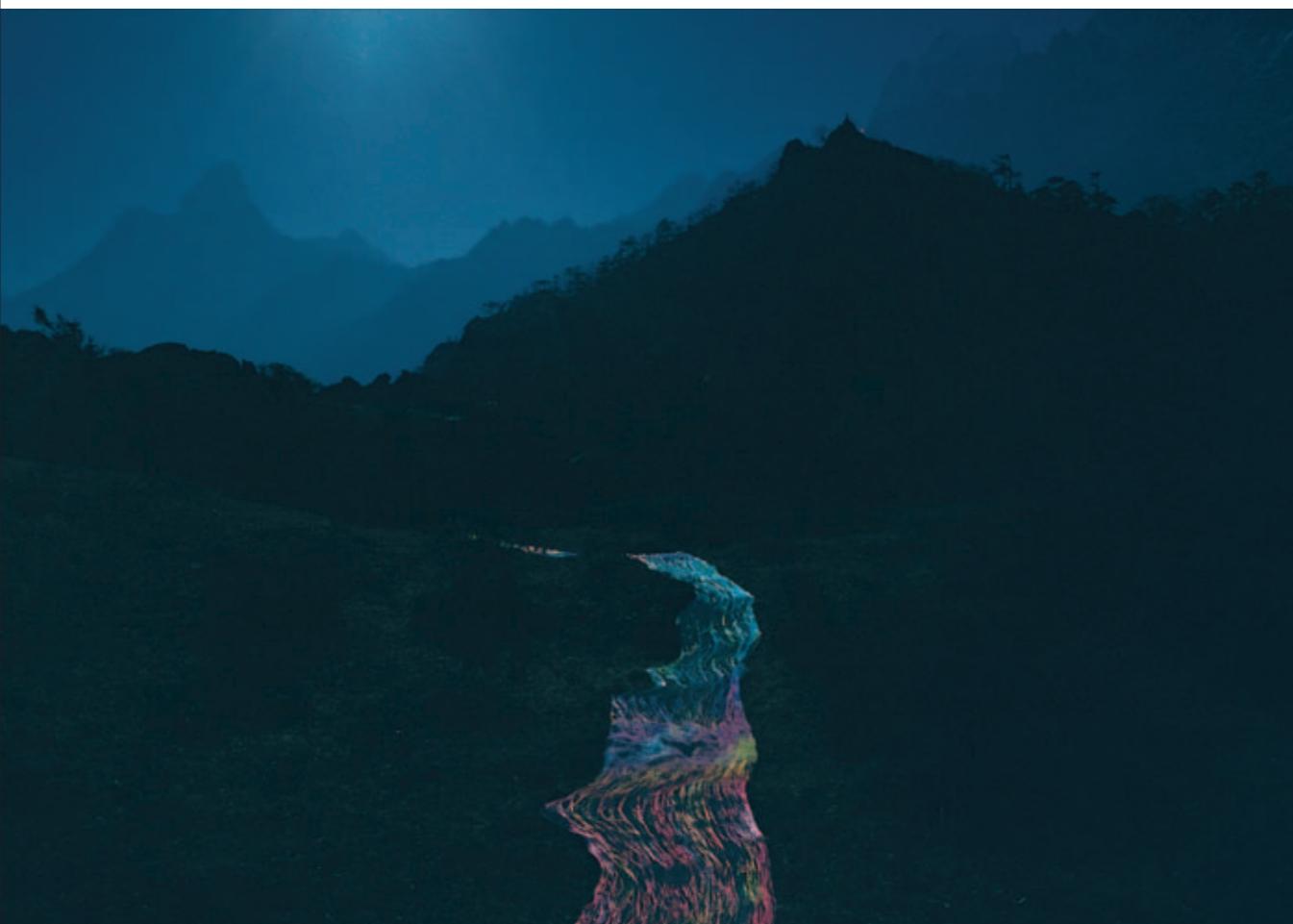
この糸は、ラックという染料で赤く染められています。ラックは、枝に寄生するカイガラムシの一種で、自分の体液と樹液とで住処（すみか）をつくり、この住処が染料になるのだと。ラックの住処で糸の色が変わるもの、「自然がもつ感情のよう」だと辻さんは語ります。

『「あか」は辻さんが魅了され続けてきた色であり、多くの意味を持つ言葉です。津軽、秋田北部の方言やアイヌ語で「ワッカ」は水を意味し、「アカ水」とは神仏にお供えする新しい水のこと。新生児は「赤ちゃん」「赤子」と呼ばれます。』〈Red like the spring water, ACACより〉辻さんは、人体を流れる血管を赤い水の流れとしてなぞらえ、「あか」とは自然と人為をつなぐ地下水脈のようなものであるとイメージしてきました。

そんな「あか」を連れて、何かに導かれるように辻さんが訪れた自然の地は、アボリジニの聖地、メキシコのモンテアルバン遺跡、流氷のフィンランド、八甲田山中、小牧野遺跡など数知れません。辻さんの言葉を借りれば、それは「失われた“祖形”的姿と出会う旅」。自然界の一部でありながら自然でないものになってしまったヒトとして、失われた魂の祖形を知りたいという深い想いが、辻さんを駆り立てているようです。

辻さんが交感したいその場所に「あか」を置くとき、辺りは急にいきいきと清らかに変貌するといいます。そんなところから、辻さんのインスタレーションを「精霊と交信しているようだ」と形容する人もあるほどです。

こんな話を聞きました。標高約4500メートル、ヒマラヤ山系の水のほとんどない場所で、まだ陽が昇る前の早朝、糸を広げたときのこと。辻さんは「もし



雨が降って小川が流れていたら、こういう線になるだろう」と思いながら、地形に沿わせて糸を置いていきました。そのインスタレーションの途中、ヤクを育てている牧童に出会い、辻さんが手招きすると、その少年はなんと、そこで水をすくいとて飲む仕草をしたというのです。少年は、糸の川に「水の命」が潜んでいることを感じとったのかもしれません。

水に放たれた赤い糸は1時間以内で引き上げられますが、水に含まれる鉄分など鉱物で微妙な色の変化を見せるといいます。鉄分が多いほど、糸は紫がかかった赤色に。また、水の動きによって糸にかかる力も違ってくるため、40メートルの中でも色や手触りが部分的に微妙に変わります。

「地球は、水と鉄でできている。体の血液も鉄分を含んでいます。水と鉄は地球そのものであり、地球と人間の体は相似形」と語る辻さん。糸を水に放ったときの感覚を、「自分の分身」というか、血管を外に出していくみたいなもの。まさに至福の時間です。自分を清浄にし、太古の自分に戻るような気がする」と表現しているのも、そんなところから来ているのでしょうか。

古代から自然界と人工とをつなぐ存在だった〈あか〉を連れて、あらゆる生命的の源である水と、そこから多くの恩恵を受け続ける人との長い歴史をたどる旅。フィールド・ワークとは、もともと考古学や民俗学などの分野で用いられる調査研究の方法ですが、辻さんが自らの表現を通して行っているのは、まさしくこうした行為なのかもしれません。

シェルバ族のためのインスタレーション(ネパール北東部)で、牧童が水をすくいとて飲む仕草をした「布(TEXTILE)の川」。川のないこの山地では水が貴重品で、辻さんも2週間の滞在中、毎日、洗面器半分だけの水で過ごしたとか。シェルバ族の人たちはヤクを飼い、その毛を紡いで織物にして暮らしています。

撮影：辻けい



辻けい 美術家、東北芸術工科大学教授
染めと織りを主体に、世界各地の水辺、森、砂漠を訪ね、フィールドワークによるインスタレーションを展開。自己(染織した布)と時空(自然の原理)との関わりを探求し続けている。

無印良品の中から、水を生かしたものづくりや施設をご紹介します。



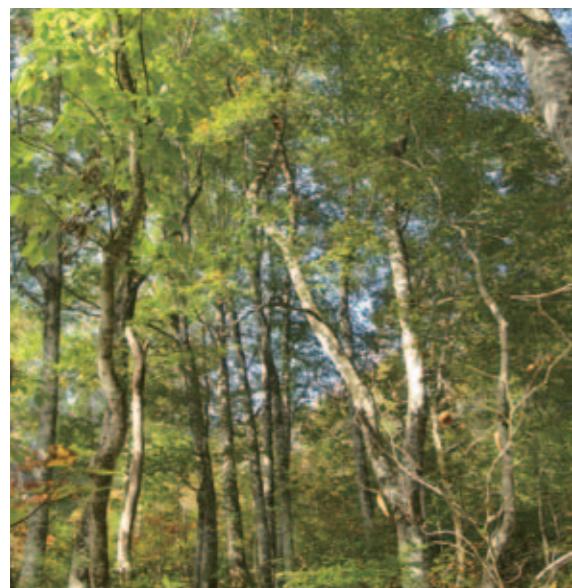
1 奥会津 天然炭酸の水

ブナ林が広がる奥会津、金山。おいしい炭酸水を探し求めていた私たちは、この地で、鉱泉から湧き出す天然炭酸入りの軟水に出会いました。ブナ林がつくりだした幾重にも重なる地層のフィルターを通ってきた、雑味のないまろやかな味わい。普通の炭酸水のように後から二酸化炭素(ガス)を添加していないので、自然の泡そのままのきめ細やかでなめらかな口あたり。いつも飲んでいる天然水に少し炭酸が入ったような、ごく自然なおいしさです。水のおいしさを味わいながら、すっきりとした爽やかな飲み口を楽しめる——私たちが探していた炭酸水でした。

海外にも天然炭酸水と呼ばれるものは幾つかありますが、無印良品がこだわったのは、料理の味わいを邪魔せず、日々の食事でおいしく飲める水。イタリア料理など強い味



国産 天然炭酸の水 500ml
[8923663] 税込137円



ライチソース付き 月山の天然水を味わうゼリー100g(1食分) [1356358] 税込189円

2 月山の水を味わうゼリー

無印良品では、果汁など素材の味を生かしたゼリーをシリーズで展開しています。その一つとして開発したのが、「水そのもの」を味わうゼリーです。そもそも、ゼリーの原料としてもっと多く使われているのは水。それなら、徹底して水にこだわろう、と「水探し」から始めて、たどり着いたのが月山の自然水でした。

万年雪に覆われ、豊かなブナの森に囲まれた月山の雪融け水は、永い年月をかけて月山山麓に湧き出でてきます。ブナの葉が落ちて土を育み、天然のダムとして雪融け水を貯え、少しずつ浸透して、湧水となるのです。この水は、ミネラルを適度に含んだまろやかな軟水。水本来の味わいを生かすために非加熱処理で殺菌しています。地元では「月山自然水」の名で売られ、地ビールの仕込みにも使われているとか。そんな水のおいしさをそのまま味わえるよう、甘みをつけずにゼリーに仕立てました。無印良品のシンプルなものづくりで、おいしい水の味を際立たせた一品です。



3 仙人秘水の化粧水

化粧品の成分として最も多く配合され、スキンケアのベースになるのは水。どんなに高価な成分が入っていても、ベースになる水がいいものでなければ、いい化粧品はつくれません。だから無印良品は、まず良質な水を探すところから始めました。たどり着いた先は、釜石と北上高地の遠野の間にある釜石鉱山。良質な磁鉄鉱石に恵まれた山岳地帯の一角です。そこに湧き出る天然水は、雨や雪が山に沁み込み数十年の歳月をかけてゆっくりと岩床に浸透し、磨かれ研ぎ澄まして、岩盤の裂け目から湧き出した軟水。生体水に近い弱アルカリ性(pH 8.8)で体になじみやすく、粒子が細かいので細胞への浸透力も高く、また酸化しにくいという特長もあわせ持っています。厚い岩盤で濾過されたおかげで不純物が少なく、煮沸や殺菌の必要もありません。煮沸や殺菌の必要がまったくないピュアな天然水をスキンケアの原料として使うのは珍しいことなのですが、この水でそれを実現できました。飲むと、体にすっと入っていくようなやさしい味。お客様から「無印良品のスキンケアは肌にすっとなじむ」というご感想をいただくのも、水に秘密があるのです。「仙人秘水」の名で飲み水として人気が高いだけでなく、料亭でも使われている天然水。飲んでおいしい水は肌にもやさしいことを、実感していただけるでしょう。



化粧水・さっぱりタイプ 200ml
[6004783] 税込580円



水とかかわるときの子どもたちの表情は、真剣そのもの。遊びを通して、自然の懐の深さを知り、水のやさしさも怖さも体感します。

4 キャンプ場の水辺遊び

津南、南乗鞍、嬬恋、無印良品の3つのキャンプ場にはすべて、湖や大きな池があります。それは、水のもつ不思議な力を知っているから。人の心を解放し、人の心に余裕を生み出すためには、「水がそこにある」ことが大切だと考えるからです。水辺を散策する、釣りをする、ただ水面を眺めて過ごす…水辺でゆったりすることは、忙しすぎる日常から離れて心を解き放つことにもなるでしょう。キャンプ場のアウトドア教室では、カヌーや、カヤック、フィッシングなど、水にかかる遊びのプログラムも用意しています。

小学生だけを対象とした「こども教室」もあります。竿作りから釣り餌探し・魚釣り・釣った魚をさばいて焚火で焼いて食べるまでを体験する「おかずを手に入れよう」、キャンプ場の沢を上りながら森と川の関係を学ぶ「川の源を探してよう」、イカダを作って湖にくりだす「湖の探検隊」、キャンプ場内の水辺に集まるさまざまな動植物を観察する「水辺探索」などなど。水辺での子どもたちは、水を得た魚のようにいきいきと輝きます。しかし、楽しさと背中合わせに危険もはらんでいるのが水。自然の中で遊ぶことで、水のやさしさも怖さも知ってほしい、とスタッフは語ります。



採水場所は、かつて磁鉄鉱の採掘が行われていた鉱山の中。鉱山として使われていたころは、「工具を水に浸けておくとさびにくくなる」と評判だったとか。

水の言葉

水が合う、水入らず、水を向ける、水くさい、水に流す…

なにげなく使っている言葉ひとつとっても、水が私たちの暮らしに

深く入り込んでいることに気づきます。水から生まれた言葉や文字を探ってみると、
水への思いや人と水とのかかわりが読み取れそうです。



沃

右の「夭」は、手足を広げた人の頭が横に曲がった姿で、「しなやか」の意味を含む字。沃は「水+夭」から成る字で、水でうるおしてしなやかにすること、つまり、地味がよいことを表わします。



湧

右側は「人+用（とんとんとついて板に穴を通すこと）」で、踊（足で地面をついておどる）の元になる字。それに「夭」が付いて、水が地面をつき通すようにおどり出る（湧き出る）ことを表わします。



決

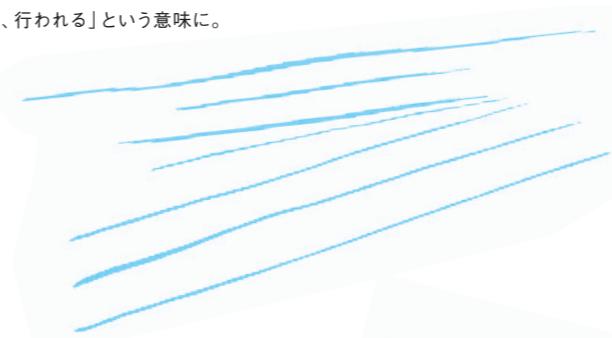
右の「夬（かい）」は、「抉（けつ・えぐる）」の元になる字で、コ型にえぐるさまを表わします。「夭+夬」の「決」は、水によって堤防がコ型にえぐられること。がっぽりと切る（切れる）ことから、決定（きまる）の意味に転じたといいます。

水が大量にあるところといえば「うみ（海）」ですが、この「うみ」を昔は「み」ともいいました。「みづ（水）」の古語は「みづ」ですが、これもまた「み」といいました。そして、一面にあふれることは「みつ（満つ）」。「海=水」は、すべての生命の源です。古代の日本人は直感的にそのことを知り、「水=生命を満たすもの」といったイメージを抱いていたのかもしれません。「みづ」はまた、「みづみづし（みずみずしい古語）」という言葉も生みました。日本のこと「みづほ（みづほ）」のくに（瑞穂国）と表現しますが、この「みづ」は水気を含んで若々しいことであり、瑞穂はみずみずしい稻の穂。水に恵まれた国・日本は、瑞穂の実る国なのです。

漢字の成り立ちからも、人と水との深いかかわりが読み取れます。そもそも【水】という漢字は、水の流れるかたちを表わした象形文字。そこから派生した「さんずい（沢）」は水を意味し、小学校の国語の授業でも「さんずいが付く字は水に関係している」と教わりました。たしかに、波、海、湖、池など、すぐに水をイメージできる字が多いですね。また「沢」は付いていないけれど中に「水」が隠れた字や、「雨」を含む字もたくさんあります。その一方で、なぜ「沢」が付いているのか、イメージしにくい字も。これらの字源をたどってみると、水と共に生き、水を尊び、水に生かされ、そして時には水に泣かされてきた人間の歴史が見えるようです。

両手で矢竹の曲がりをまっすぐにのばす形を表わした象形文字「寅」と「夭」が一つになった字。本来の意味は「長くまっすぐにのびた水」つまり「長い川」で、転じて「演技」「講演」などのように「徐々にことが展開され、行われる」という意味に。

演



永

水流が細く支流に分かれて、どこまでもながく伸びるさまを描いた象形文字。折れ曲がって細くながら続く意味を含み、そこから、時間のながく続く意味で使われます。

電

稻妻が屈折しながら走る姿を表わす古代文字「申に「雨」を付けてできた字。「稻妻」の意味にも、「稻妻のように速い」の意味にも使います。雨と稻妻は、やはりセットのようです。



泉

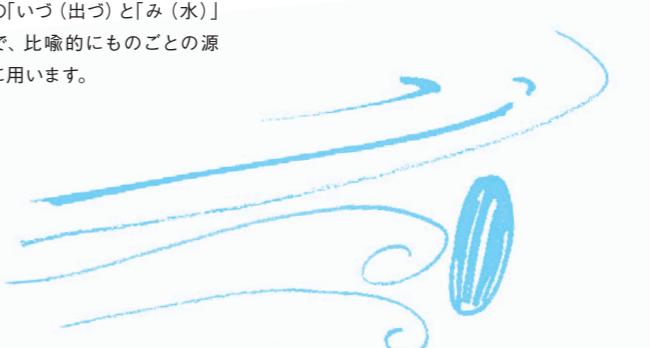
丸い穴から水の湧き出るさまを表わした象形文字。日本語の「いづみ」は、外に出る意味の「いづ（出づ）」と「み（水）」から成る語で、比喩的にものごとの源を表わすのに用います。

漆

漆器に塗られる天然塗料を探るためのウルシ科の木の名前。字の右側は、上部が「木」で下半部は水滴が点々と落ちる姿。漆採取は、幹に傷をつけて木から涙のように滴り落ちる樹液を集めますが、その工程を映した字なのかもしれません。

減

右の「咸（カン）」は「戌（ほこをもつ）+口」の会意文字で、人々の口を封じこめること。「夭」が付いて、水源を押さえ封じて流れの量を減らす意味になり、後に、もっぱら減少の意味に使われるようになったといいます。



水の質

水についてのアンケートの結果はこちら>>
www.muji.net/lab/living/water-report.html

日本は水道水をそのまま飲める数少ない国ひとつです。
その一方でミネラルウォーターの消費量が増え続けているのはなぜでしょう。
ここではアンケートの一部を紹介しながら、
おいしい水や体によい水など「水の質」について考えてみたいと思います。

「水についてのアンケート」2012年5月実施 4327名参加

水についてのアンケートでは、87%の人が「日本の上水道の水はきれい」と答えています。たしかに日本は世界に誇る水の豊かな国。蛇口をひねると安全な水が飲める数少ない国ひとつです。しかし、その水が「おしくない」と答えている人も42%。42%の人が浄水器を使い、40%の人がペットボトルの水を買っています。つい30~40年前までは水を買うなんて考えられなかったことですが、多くの人が「水の質」にこだわっているようです。とはいっても、「ミネラルウォーター」と言っているものにも違いがあり、国の基準で分類されていることを知っている人は少ないかもしれません。

農水省によるミネラルウォーターの分類

1:ナチュラルウォーター

特定の水源から採水された地下水を原水とし、沈殿・濾過・加熱殺菌以外の物理的・科学的な処理を行っていないもの。

2:ナチュラルミネラルウォーター

ナチュラルウォーターの中でも、ミネラルをもともと含む地下水を原水とした水。処理法はナチュラルウォーターと同じく、沈殿・濾過・加熱殺菌に限る。日本で一般的に「ミネラルウォーター」と呼ばれているのはこのタイプ。

3:ミネラルウォーター

ナチュラルミネラルウォーターの中でも、品質を安置させる目的のため、ミネラルの調整やばつ氣、複数のナチュラルミネラルウォーターの混合、紫外線やオゾンによる殺菌・除菌などの処理を行っているもの。

4:ボトルドウォーター

上記以外の飲料水。たとえば、純水、蒸留水、河川の表流水、水道水などがこれにあたる。処理方法の制限はなく、大幅な改変を加えることも可能。

おいしい水、体にいい水とは何でしょう？水を知るための手がかりになるのは、容器のラベル。中でも重要なチェックポイントは、殺菌方法、硬度、PH値、栄養成分の4つです。

水を知るためのチェックポイント

殺菌(処理)方法

加熱殺菌したものは水の組成が変わっています。理想は無殺菌ですが、濾過であれば水の組成はさほど変化しません。

硬度

水の性質を表す最大の指標です。この硬度によってカルシウムとマグネシウムの含有量が判断でき、味や健康効果を知る手がかりになります。

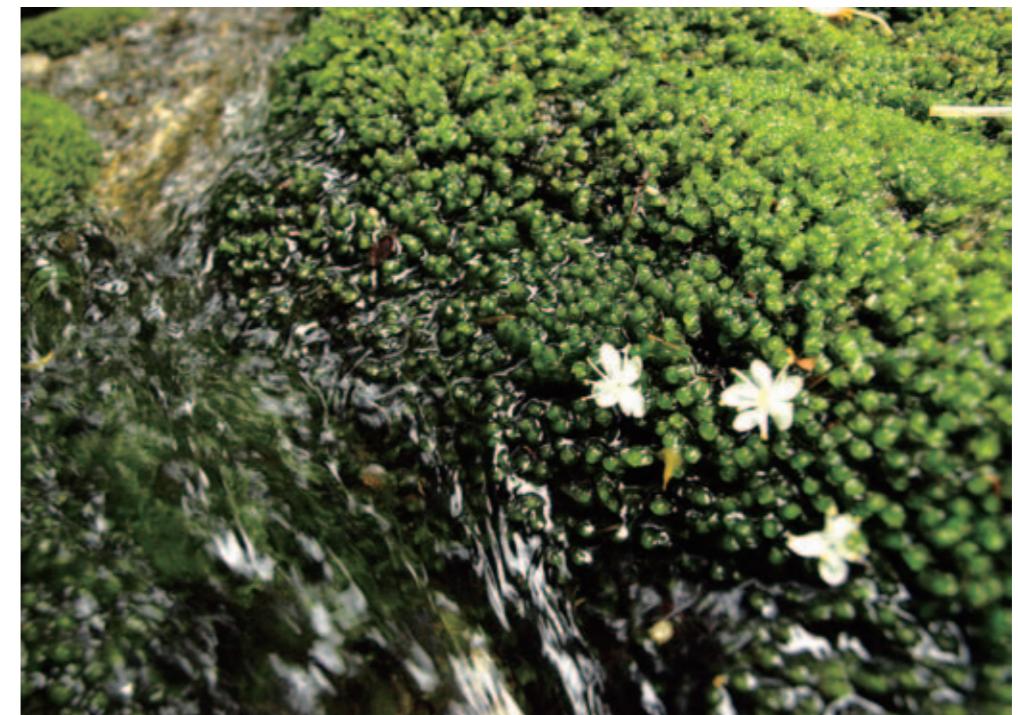
pH値

水の酸度を示し、pH7を中性としてそれよりも数値が低いと酸性、高いとアルカリ性の水であることを表します。

栄養成分

水に含まれるミネラルの種類と分量が記載されています。

調和のとれた水



水は生命が生きていく上で必要不可欠なものです。水分そのものが必要なだけでなく、栄養や酸素など、生命に必要な様々なものも水に溶けて運ばれます。

「長寿の場所は水がよい」と言われるもの、こうしたことによればあります。

また、昔から水には不思議な力があるとされてきました。禊(みそぎ)に代表されるように、穢れ(けがれ)を落としたり、場を清(きよ)めたり、神社のご神体になったりと、目に見えるものばかりではなく、目に見えない力を運んでいるように思われます。

辻さんのアートからも、水の神秘的な力を感じ取ることができます。

様々な生命が水から生まれ、そしてその命は水がめぐることで維持されています。

生命を生み、生命を支えるのは、煮沸消毒や塩素で滅菌した水ではなく、

自然のままの「調和のとれた水」。生命力のある「生きた水」に触ることで、

人は活力を得ることができます。

そんな理由もあって、昔から町をつくるときは、水の配置を見ながらつくったのでしょう。

しかし、近代社会における水の大量消費は、水が本来持っているはずの調和を壊しているかもしれません。バランスを崩した水はひとびとめぐらすと、悪循環を始めます。

汚れた水は土に滲み、川に流れ、海に流れます。そして海の水は雨になります。

再び私たちの体に戻ってきます。海がすべての汚れを分解してくれるわけではありません。

飲む水、捨てる水、そして川や海、また森の木々など、自然環境を守る必要は

こうしたことにもあるのです。水を大切にするということは、

自然の摂理に従った「調和のとれた水」を維持することなのでしょう。

きれいで生命力のある水が、未来もこの地球上に湧き出ることを願って、

日々の水への思いをもう一度考えてみたいものです。水はすべての生命の源なのですから。